

当院における医学的適応による未受精卵凍結の現状と妊娠した 1 例の報告

<sup>1</sup>阪本なつき、<sup>1</sup>佐藤学、<sup>1</sup>中岡義晴、<sup>2</sup>森本義晴

<sup>1</sup>医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

<sup>2</sup>医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【諸言】近年、若年がん患者数は増加傾向にあるが、がん治療の進歩により予後は大きく改善している。それに伴い原疾患治療後に挙児を希望する患者は今後増えることが予想される。当院でも、2006 年より医学的適応による未受精卵の凍結保存を開始しているが、今回、その現状を報告する。また、妊娠・出産した 1 例について報告する。

【現状】当院にて 2006 年 1 月から 2021 年 12 月までの 15 年間に当院で医学的適応による未受精卵凍結を希望したのは 91 症例で、うち卵子凍結に至ったものは 85 症例であった。85 症例（乳がん 52 例、血液疾患 16 例、その他 16 例）のうち凍結後に廃棄を希望したのは 8 症例（死亡 5、患者希望 3）であった（9.5%）。採卵時平均年齢は  $32.1 \pm 6.7$  歳、平均採卵数は  $9.2 \pm 7.5$  個、成熟卵数と凍結数は  $7.9 \pm 6.0$  個であった。原疾患治療後、挙児希望にて当院を再受診したのは 6 症例で、うち 4 例で妊娠が成立した。

【症例】42 歳。未婚。G0P0。2016 年 10 月、他院で乳がんと診断され、妊孕性温存治療希望にて当院受診。十分なインフォームドコンセントを行った後、手術療法前に 1 周期、手術療法後に 3 周期の採卵を行い、計 8 個の成熟卵子を凍結保存した。2020 年 5 月入籍し、2020 年 8 月に原疾患主治医の妊娠許可を得て、挙児希望にて当院再受診。原疾患治療後無月経にて、凍結保存している卵子 8 個を全て融解し生存卵子 8 個に対し新鮮精子を用いた顕微授精を実施し、得られた 6 個の正常受精卵のうち分割期胚 1 個（Veeck 分類:Grade3）をホルモン補充周期にて胚移植を行い妊娠が成立。2021 年 11 月、妊娠高血圧症候群のため帝王切開にて 2894 g の男児を出産。現在、余剰胚は 2 個凍結保存中である。

【結論】未受精卵凍結は化学療法を控えたがん患者にとって有効な治療であることが示唆された。しかしながら、未受精卵凍結の報告は未だ不十分であり、今後、さらなる症例の蓄積と予後に関する検討が望まれる。